

[研究ノート]

明治 30 年代の修身教育の実際 「河村瑞軒の話」

—佐々木吉三郎『修身教授撮要』掲載 修身科授業教案及び速記録—

A moral education in the Meiji 30's "The story of Kawamura Zuiken"

A record of moral education posted in Kichisaburo Sasaki's *Shushin Kyoju Satuyou*

佐藤 淳 介

Sato Junsuke

大分県立芸術文化短期大学

研究紀要 第 54 巻

2017 年 3 月

[研究ノート]

明治30年代の修身教育の実際「河村瑞軒の話」

一佐々木吉三郎『修身教授撮要』掲載 修身科授業教案及び速記録一

A moral education in the Meiji 30's "The story of Kawamura Zuiken"

A record of moral education posted in Kichisaburo Sasaki's *Shushin Kyoju Satuyou*

佐藤 淳 介

Sato Junsuke

佐々木吉三郎の略歴については、藤原喜代蔵『明治大正昭和 교육思想學說人物史』¹に詳しいので、それを引用したい。

「宮城県の人、明治五年十一月、遠田郡沼部村に生まれた。幼くして和漢洋学を修め、三十三年宮城県師範学校に入り、二十七年卒業して同校付属小学校訓導となり、翌年高等師範学校文科に入学して、三十二年三月卒業し、同校附属小学校訓導に任ぜられ、幾何もなくして教諭に進み助教授を兼ねた。明治四十年、教授法及び訓練法等の研究の爲め独逸に留学し、教育施設及びその實際を視察し、傍ら柔道を外人に教授し、更に仏・英・瑞典・丁抹から米国にも渡って、教育学、教授法の研究を遂げて二十二年七月帰朝。東京高等師範学校教授となった。教育学を講じ附属小学校主事を兼ねて教育實際界を指導した。大正十年東京市視学となり、十一年十二月学務課長となったが、翌十二年十一月、年五十四歳をもって歿した。著者には「小学校教授の原理」「小学校教授の實際」「修身訓話」「修身撮要」「訓練撮要」「教育的美学」などがある。」

佐々木は早くから、ヘルバルトをはじめとする西洋教育学の紹介と普及に尽力し、とくに修身教授ならびに訓練法帰還しては当時の第一人者であったといえる。佐々木がこの教案を発表した『修身教授撮要』(1902年)が出版された時期は、修身科教育の一変革期であったといえる。1890年に小学校令(第2次)が公布され、修身科教授は従来の教師による口授法から、生徒用の教科書を使う授業方法に変わっていった時代であった。修身科の授業では、教師が教師用の教科書等を参照して、生徒に例話をするといった授業方法であった。それが生徒も教科書を使用するということから、その内容・方法が一変されたのである。

もとより、修身科の授業内容は小学校令をはじめとする法令で規定されていたが、實際の授業ではかなり教師による裁量の範囲が大きかったものと想像される。しかし、教科書による授業となれば、その教科書に沿って授業が進められることが求められるわけであり、かなり画一的な授業が全国で始められた。しかも、一定の時間に教科書を進めていけ

ば、どうしてもその内容は浅いものとなりがちであって、法令で定められた徳目を順に簡単な例話を読んで進めていくような授業であった。

当時の修身科の徳目は「小学校教則大綱」(1891年)に「修身ハ教育ニ関スル 勸話ノ趣旨ニ基ヅキ児童ノ良心ヲ啓培シテ其特性ヲ涵養シ人道実践ノ方法ヲ授クルヲ以テ要旨とす 尋常小学校ニ於イテハ孝悌、友愛、仁慈、信実、礼敬、義勇、恭儉等実践ノ方法ヲ授ケ殊ニ尊皇愛国ノ志氣ヲ養ハノコトヲ務め又国家ニ対スル責務ノ大要ヲ指示シ兼ネテ社会ノ制裁廉恥ノ重ンスヘキコトヲ知ラシメ児童ヲ誘キテ風俗品位ノ純正ニ趨カンコトニ注意スヘシ 高等小学校ニ於ハ前項ノ旨趣ヲ拓メテ陶冶ノ功ヲ堅固ナラシメンコトヲ務ムヘシ 女児ニ在リテハ殊ニ貞淑ノ美德ヲ養ハノコトニ注意スヘシ 修身ヲ授クルニハ近易ノ俚諺及嘉言善行等ヲ例証シテ勸戒ヲ示シ教員ノ身自ラ児童ノ模範トナリ児童ヲシテ浸潤薫染セシメンコトヲ要ス」とあるように、教育勸話の徳目の教授を中心とするものであった。

したがって、修身科の生徒用の教科書の内容も、こうした徳目を順に並べ、その例話を配置したものであった。こうした教科書の例話は、一つの徳目に一人の人物の例話を取り上げる形式のものが多く採用された。しかし、ページ数の制限もあり、その例話はかなり断片的なものになっていることが多かったのである。

当時修身科教育を実際に行っていた教師たちの中には、こうした徳目を順に例話で並べ立てた教科書に対して批判的であったものがいた。佐々木もそうした一人であり、『修身教授撮要』の中でもこれを批判している。

修身科教科書の徳目主義に対する批判は、その教育的効果の問題であったといえる。一つの徳目を簡単な人物の断片的な例話で取り上げる授業では、児童の興味が起こらない、言い換えれば、一人の人物には、色々な徳目が備わっているものであって、人物のさまざまな徳目をその人となりから味わい、感銘させるようであれば、実際児童の道徳教育にはならないという考え方である。

佐々木は『修身教授撮要』の中で次のように述べている。「徳目というものを先に数えて、それ孝行の徳にあたる人々はダレダレであるといつて、その人々の孝行にあたる一部分だけを切り抜いて、いわゆる切り抜き通信流儀に、ぽつぽつ持って来て紹介するというのは、甚だ効能が薄いということは、前に申したとおりで、実は、その人間というもの、孝行であるばかりでなく、忠義でもあり、正直でもあり、勤勉でもあって、それらの事柄が錯綜しているのが、自然であって、その錯綜せるものが、総合されて、一個の慕わしい人格が出来るのであるから、あらゆる方面から、その人の近づきになってこそ、ああ、その人が慕わしい、そういう人になりたいという気にもなる」「徳目というものを標準にして、修身の教授をしようと思えば、その結果単に知識教授としてすらも、すでに失敗するものである、いわんやです、かかる断片の知識を持って、道徳的情操を養うなどは、もつてのほかなことであると申さなければなりません」

こうした佐々木の考え方を実際の授業に活かしたものがこの授業である。当時の修身科教科書は主に教訓や格言や徳目がはじめに設定されて、それに関係する逸話を順に並べてあった。しかも、その並べ方は教育勸話の徳目に沿ったものとなって、前後の脈絡が無く、しかも断片的であったといえる。したがって、そのような教科書を用いた修身科の教授はともすると画一的で児童の興味関心を呼ぶようなものでなかった。そこで、一人の興

味ある人物を丁寧に語り、それを数単元の構成とし、多くの逸話の中から、多くの道徳的
行為・判断を示していく方法がとられた。これによって、対象となる人物に児童が興味を
抱き、親近感を持たせることに成功している。さらに、時代的な社会事物の解説やしきた
りなども多く含ませ、多くの道徳的価値を自然に教授しているのである。佐々木はこのよ
うな修身教授を以て道徳教育が完成されるとは考えてはいない。ここでは触れないが、
佐々木の修身教授はこれに加えて「訓練」の必要を重視しているからである。

それでは、実際の佐々木の修身科教授を見ていくことにしたい。ここで取り上げた授業
は、8単元の構成になるもので、その構成を示すと次のとおりである。

第一 単元

主要題目 瑞軒が少年の頃の有様

第一部分題目 瑞軒の家庭の有様

- 1、幼名
- 2、郷里〔教訓 人間は貧苦に生まれたりとて失望するに及ばざること（大名の子に生れぬが幸に候と云し人ありしにあらずや）〕
- 3、家庭、
- 4、十三歳の時江戸に出でしこと

第二部分題目 瑞軒始めて江戸に出でしときの有様

- 1、車力を仕事としたること〔教訓 自分の仕事はどこまでも能く勉むべきこと〕
- 2、馬鹿七兵衛と嘲られ其の賃銭の横取りせられしこと
- 3、車力仲間の雑談を聞きて憤然志を立てし事〔教訓 志あるものには雑談も非常の教訓となる注意せよ〕

第三部分題目 瑞軒大阪に赴かんとせしこと

- 1、仲間の雑談を聞きし夜の有様
- 2、旅費〔教訓 決心の必要 「可愛い子に旅をさせよ」と云へる意〕
- 3、道中の災難
- 4、一老爺の親切〔教訓 老成の人の戒あらばよく考えて之に従うべし〕
- 5、瑞軒初志を翻へして江戸に帰る

第二 単元

主要題目 瑞軒次第に金儲けの手蔓を得しこと

第一部分題目 漬物を始めしこと

- 1、品川の海に流れ来る盂蘭盆の送り物（茄子、胡瓜、呉座類）を拾い集めんと志したること
- 2、一軒の裏長屋を借りて之を住家とせしこと〔教訓 天は自ら助くるものを助くるの意〕
- 3、乞食を傭うて盂蘭盆の送り物を拾い集めたること〔教訓 廃物利用の大切なること〕
- 4、砂糖や、酒の空樽を買い又は貰い集めしこと〔教訓 機転〕
- 5、塩を買い拾い集めたる野菜を漬け込みしこと

第二部分題目 壁のつたを作りしこと

- 1、乞食を傭うて草靴馬靴の棄たるを拾い集めしこと〔教訓 廃物利用〕

2、之を刻してつたとしたること

第三部分題目 漬物と壁のつたを売りしこと

- 1、芝の大名屋敷の大普請
- 2、瑞軒其の普請場に漬け物を売りに行きしこと
- 3、漬物の評判〔教訓 暴利を貪るは真の商訣にあらず〕
- 4、左官の棟梁につたを売りしこと
- 5、つたの評判
- 6、瑞軒利益と信用とを得たること〔教訓 信用は商業の第一の資本なり〕

第四部分題目 瑞軒壁土を売りしこと

- 1、従来 of 壁土の練り方
- 2、左官の棟梁の苦心
- 3、瑞軒壁土を取ることを工夫せしこと
- 4、壁の評判

第五部分題目 瑞軒大に仕事場の人々に信用を得しこと

- 1、人足頭に備はれしこと
- 2、瑞軒仕事の手配に巧なりしこと
- 3、人足共が瑞軒に感して之を慕うこと〔教訓 人を使うものは恩威を兼ね備うへし〕

第三 単元

主要題目 瑞軒独立の職業を執りて巨万の富を得しこと

第一部分題目 受負師として益々信用を得るに至りしこと

- 1、芝に一家を持ちしこと〔教訓 家庭の楽〕
- 2、改名
- 3、受負師として信用を得千両余りの金持となりしこと〔教訓 瑞軒受負師根性なかりしこと〕

第二部分題目 材木を買い込み巨利を博せしこと

- 1、明暦三年（今より百四十四年前）の江戸の大火〔教訓 火の用心〕
- 2、瑞軒家内に諭ししこと〔教訓 大変に処する心得〕
- 3、瑞軒甲州街道を経て信州木曾に至ること
- 4、木曾の樵夫の家に憩い策を以て信用を博せしこと〔教訓 瑞軒のお土産と茶代とは令の広告と略同じきこと 広告の必要〕
- 5、樵夫爺の案内にて土地の山持共に会いに行かんとせしこと
- 6、小判のお土産を貰いし家の驚ろき
- 7、瑞軒大山持の家にて材木買入れの談判を済ませしこと
- 8、有らゆる材木に〇河の極印をつけしこと
- 9、其後江戸大火の報木曾に達せしこと〔教訓 機敏と狼狽との別〕
- 10、江戸の材木商続々と木曾に來りしこと
- 11、瑞軒巨利を博せしこと〔教訓 商人は機敏ならざるべからず（智）〕
- 12、瑞軒江戸に帰て家屋を新築せしこと
- 13、瑞軒盛んに土木受負業を営みしこと（ここに初めて瑞軒と称す）〔教訓 商人は信用

を得ざるべからず（徳）]

第四 単元 瑞軒の奇智

第一部分題目 瑞軒釣鐘をかけしこと

- 1、増上寺の釣鐘落ちしこと
- 2、釣鐘の用
- 3、釣鐘を引き上げる入費
- 4、瑞軒十両にて半日間に成就せんとて受合しこと〔教訓 智慧の効能〕
- 5、米屋との評判
- 6、瑞軒の智慧の鐘

第二部分題目 瑞軒鬼瓦を上げしこと

- 1、寛永寺の鬼瓦落つ
- 2、散歩〔教訓 運動の必要〕
- 3、瑞軒紙鳶を借りて縄梯子を掛けしこと〔教訓 物の利用〕

第六単元 瑞軒幕府の信用を受けて功を立てしこと

- 1、幕府貢米の廻漕に困難せしこと
- 2、瑞軒舟運の事情を研究す〔教訓 問うは当座の恥知らぬは末代の恥〕
- 3、瑞軒人を遣わして実地を調べしむ〔教訓 思慮精密〕
- 4、瑞軒の改良案

- (1) 船
- (2) 船旗
- (3) 船頭
- (4) 船改場

5、羽前羽後の方面の運漕の改良〔教訓 艱難辛苦〕

第七単元 瑞軒恩人に報いしこと

- 1、隅田河畔に居宅を新築せしこと
- 2、瑞軒測らず恩人に遇いしこと〔教訓 親切〕
- 3、恩人を救いしこと〔教訓 報恩〕

第八単元 瑞軒の苦学

- 1、僅かの余暇を偷んで勉学せしこと〔教訓 勉学の効能〕
- 2、著書

以上の授業計画の下に実際の授業がなされている。それでは、その第三単元、主要題目「瑞軒独立の職業を執りて巨万の富を得しこと」の第二部分題目「材木を買い込み巨利を博せしこと」の教案を見ていきたい。

第二部 尋常科 第三四年修身科教案 著者案

- 1 題目 河村瑞軒の話
- 2 教材 主として「教材叢書修身訓話」巻の七 四十二頁より六十一頁までを参考として、前に述べたる目次第三単元の第二部分目的中より以下を教授す。

3 目的 商人は勿論、一般の人と雖も、機敏なることと、人の信用を得ることとは、ふたつながら大切なることを悟らしむるにあり。

4 準備 日本地図一幅

5 教法

◎目的指示。

今日はこの前の時間に半途までお話しして置いた瑞軒のお話で、いよいよ材木を買い込むことが出来て、大変なお金持ちになることをお話ししましょう。

◎予備。

A この前のお話では瑞軒が何処まで行きましたか・・・

何故そんな処に行きましたか・・・

火事が起こってからの事を今一度話せ・・・是正。

B 木曾に着いてから子供に小判のお土産をやった事をいいましたが、今日お話しする所は、「何故瑞軒がそんな立派なお土産を遣ったのですか」が、よく分からないといけなから、その事を先に考えて見ましょう・・・何のためだと思いませんか・・・何故えらい金持ちだと思わなければならなかったのですか・・・よろし、貧乏なものに品物売ることは約束が出来ないね、金がない時には、何時もよく言うように、人の信用（あの人なら大丈夫というて、よく自分のいう事をホンにして呉れる事）がなければなりません、ね、それでは何故瑞軒は（自分で己れは江戸の大金持だ）と言うて歩かないですか・・・それでは何故駕籠舁に言わせないのでですか・・・広告の二要件

◎提示。

A 対話的教式によりて左の各項を談話問答す

- (一) 子供が小判を貰い家に帰りしこと。
- (二) 其の家内の喜び・・・驚き・・・御礼の支度等。
- (三) 瑞軒樵夫婦に百円の茶代を与えて山主に案内せしめたる事。
- (四) 大山主の家の有様。
- (五) 談判成就
- (六) 極印。
- (七) 五日目頃江戸大火の報木曾に達せし事。
- (八) 江戸の木材商瑞軒の機敏に及ばぬ事。
- (九) 瑞軒巨利を得たる事。
- (十) 瑞軒江戸に帰る事。
- (十一) 土木業益々盛大となりし事。

B 探求的発問。

- (一) 他の材木商等は江戸の大火にあいて如何なることをしたりしならんか。

◎比較

- (一) 他の材木商と瑞軒との異なる所。
 - (1)。火事に処して 瑞軒は小を捨てて大を取る。
 - (2)。材木買入れにつきて 瑞軒はスバシコイ（機敏）
 - (3)。うけおいにつきて 瑞軒は信用を得た（正直）

◎統括。商人は勿論のこと、総て人間は機敏にして万事注意深からんことを要す。

然れども、ただ機敏なるのみにてはあらず。正直にして人の信用を得ること大切なり、即ち智と徳

◎応用。あなた方の行いについても、スバシコイ事のよいことが沢山ありますね。

- (1) 若しえらい商人になろうと思えば、如何したら宜しきか。
- (2) 起立の時、集合の時・・・此頃の運動会の機敏なりしことを賞す。
- (3) 商人として正直であろうと思えば如何なることに注意せねばならぬか。
- (4) 商人のみが正直が大切か・・・例をあげよ。

この、教案に沿って実際に行われた授業記録ⁱⁱⁱを次に示す。

実地授業（速記）

（四年生鈴木武。）集まれ。（構内体操場生徒二列集合）。右向け・・・右。一、二、一、二。（生徒整然教場に入る）。立て。（生徒起立）。礼。（一同敬礼）。

（教）今日は河村瑞軒のお話の続きですが、此前の時間（授業）に中途になっていましたね、今日はいよいよ瑞軒が木曾に行って材木を買い出して、大変お金を儲ける事になります。其処のお話を致しましょう、

此前、どういう所まで進んで居りました？○○（丙）。

（生）木曾に行って、お爺さんが一人居る所で、縁側に腰を掛けて居たら、其所に小児が大勢棒を持って遊んで居たから、其の小児に、江戸の土産を遣るといって、小判の隅の所に穴を開け、縄を通して遣ったところまでです。（級決）

（教）そう、瑞軒は何故木曾などに行ったのですか○○（乙）。

（生）火事があったから逃げて行ったのです

（教）そうですか・・・○○（甲）。

（生）家が焼けたから逃げて行った。

（教）逃げて行ったのですか、あんなに遠くまで・・・火事のために家が焼けたから逃げていくのならば、一里も逃げたらよいではありませんか、三日も四日も要って・・・○○（甲）。

（生）材木を買いに行きました。（級決）

（教）そう、何にする材木を買いに行ったのです。○○（丙）。

（生）火事で焼けたから、家を建てる材木を買いに行きました。（級決）

（教）瑞軒は、材木の商人でありますか。○○（甲）。

（生）受負師です。（級決）

（教）そう、受負師・・・（ボードに受負師と記して示す）

（教）受負師というのはどんなことをするものですか。

（生）大工や左官を大勢使って家を建てたり、橋をかけたりするものです。

（教）そう、その受負師の瑞軒が材木屋のようになって、材木の買出しに行こうというので木曾に行ったのでしたね、木曾は（地図を示す）この白い筋の所です・・・瑞軒はもつと余所に行かずに、なぜ態々遠い所の木曾に行ったのですか。○○（乙）。

(生) 木曾はよい木があるから行ったのです。(級決)

(教) そう、この前も言うたように、木曾の材木というものは、名高いのですね、そして、今も、大へんに生い茂っているそうです、此辺を(地図を示し)歩行くと、昼でも暗いような所があるそうです、大木が繁っておって、木の上には猿などが、遊んでいるところもある、其の下を通る人が石でも投げたりすると、スッと上の方において、木の枝を折って人に打付けたりするそうです、面白いじゃありませんか。その様に、木が生い茂っているのですが其木はどれも皆能い材木です、それですから、節無しの上等の材木だとかいって、今でも、東京で立派な普請をする時には木曾の材木を使うのです。

そこで、これから、其さきの方をお話しするのですが、その前に、考えて置かなければならないことが一つあります。此前のお話の時に、瑞軒が小児に小判のお土産を遣ったという話をしましたね、さあ、それです、なぜ瑞軒がそんな沢山のお土産を遣ったのであるか、其訳が分かるかというと、今日のお話が能く分かるのですが、瑞軒は「何故そんなに沢山の御金を小児に遣ったのか」ということを考えてみないといけない、小判というものは、此前のお話してわかっている通り極めて、大切のもので、無暗に人に遣るとい様なものじゃないでしょう、小判などは、田舎の人などは、普通の人なら、見た事もない位のもので、それを、何故、火箸で穴を明けたり何かして、小児にくれたのでしょうか、これを考えたものは瑞軒にも負けない智者ですね、〇〇(甲)。

(生) えらい、金持ちだということを、思わせるためです。

(教) えらい金持ちだと思はして何をするですか。

(生) そすると、材木を売って呉れるから。(級決)

(教) そうです、よく考えましたね、なんでも。商売をするのには、いくら、自分が売りたいとも、買いたくとも、そのことが余所の人に知れないと駄目ですから、第一にあの人が何をするかということを知らせることと、それから又、あの方はえらい人だ、あの店はよい店だという様に人からよくいわれることが大切ですね、それだから、今の商人でも、皆自分の店のことを世の中に知らせたいと思って色々工夫をしているでしょう、誰かそんなことを知っていますか。

(生) 広告をする。(級決)

(教) よろしい、今でも商人が商売をするには、総て広告というものをするのですね、広告というものを外の人も知っていますか。〇〇(甲)。

(生) 楽隊で途を通ったりします(級決)

(教) 其外には。

(生) 色々の看板をかけたりします(級決)

(教) そう、何か煙草屋なんぞにしても、楽隊を頼んで来て、ジャンガジャンガジャンガと可笑い調子で騒いで歩いたり、ヒーローだとかサンライズだとか大きな看板をかけたりしますね、ああいうことをすると、オヤあその家は煙草屋ですね、ヒーローも、サンライズも何でもあります、アア、大変近い所に煙草屋が出来た、これから煙草を買う時には、三軒目のあの家で買おうじゃないかという様になりますね、瑞軒がお土産をやったのも、ここに大金がいて、材木を買いたがっているということを知らせたいために、あんな大したお土産をやったのだから、広告・・・マア広告と同じことですね、瑞軒が木曾へ

行っても、誰もまだ知らない、何所の人が何しに來たのか分からない、それかといって、自分が、駕籠に乗っておりながら、オーイオーイ誰か材木を売って來れないかと、大きな声をして歩行いても、駄目でしょう、其所で瑞軒が考えて、どうしたら自分の所に木を売ってくれることになるだろうと考えたね、どうだろう、もし瑞軒が、自分で、「俺が大金持ちだから材木を売ってくれないか」といったら。

(生) 自分でそんなこと言っているような人は馬鹿だから売らない。(級決)

(教) そうです、そんなことを自分でふれて歩いたって旨く買う事が出来ないね、なんでも、向こうの方で今度材木を買いに來たお方は、大変お錢を持っている、こういう人に売ったらよかろうと、自然に思う様にしないと売られないでしょう、瑞軒が小兒らに小判のお土産を遣ったのは、彼所に大変金持ちの商人が來ているということを知らせるので、彼の商人恐ろしい金持ちでどれだけ売っても大丈夫、あとで代金をよこさないような、そんなつまらない商人じゃないと言うことを知らせるために、大切な小判を惜しげもなく遣ったのですね、それだから、昨日もいったように「オイオイ坊ちゃん達、あなた達は大変可愛い小兒達だね、ソラ、江戸のおじさん、お土産をあげますぞと言って、火箸で以て、小判に穴をあけて、それに縄を通してくれたのですね、小兒等が貰って見た所が、どうもピカピカ光って、カランカランと、良い音がするから、喜んで遊んでおったのです、ところが、さっきから、それを、黙って見ていたお爺さんが、心の中でイヤドウも恐ろしい事をする人だ、小判に穴をあけて、二枚も三枚も藁で通して惜しげもなく子供にやるなんて、マア、この人は、一体どんな人だろう何でも江戸という所には將軍様とかいうえらいお方がお出になるそうだが、其將軍様でもあるだろうか、ナニセ、恐ろしいえらい人だろうと思うて恐れておったのですが、子供等が瑞軒の前に来てしきりと、うれしがって、跳んだりねたりして、いるものだから、なくしたら大変だと思って、那方様は、大概にして、お取り上げになさいませんと、つい子供等が紛失でもすると大変の事になります、「オイオイ早く、サア早く江戸の叔父さまに帰さないか、コラコラ、小判を棒に着けてふりまわしたりして罰が当たるゾ、」と、しかっていました所が瑞軒は焉然焉然笑いながら、「お爺さん、構わんで下さい、此小兒さん達は、大変可愛い小兒さん達だから、何かよいもの上げたいと思うたけれども、別に、道中で珍しい物もないからソレヲ、遣ったのです」というと、お爺は、又ビックリして、それじゃ本当にアレヲ下さったのですか・・・「オイオイコラコラ、お前達は、江戸の叔父さんに大変立派なものを戴いたゾ、マア、ソナナ大したお土産をいただいて、ナント有難いこった、サア、早く、皆家へ帰って行ってお父さんやお母さんに見せない、ソシテ、お父さんか、誰か、早くお礼に來いって爺やがいったってサウいいなさい」というものだから・・・それから小兒は喜んで、棒の先に小判をつけて之をかついで、ミンナ、銘々の家に帰って行きました、ソシテ、門口の処から、「とうチャンかあチャン己等江戸の叔父さんからお土産戴いたよ」といって、かけて來たから、何をいただいたんだよといいながら、ソレヲ見ると、コレハ、シタリ、ピカピカ光ってる小判ですから驚いて、江戸の叔父さんというのはドンな人だったと聞きまされたけれども、ナンダカ、子供のいうことは能く分からないですから、何でもお爺さんがお礼に來いっていったこと丈がわかるし、ともかく、お礼をいいにといっってそれじゃ羽織を出せの何のと言うて大騒ぎをしていました。

ところが、瑞軒はどうしておりましたろう・・・瑞軒は、其所にゆっくりしていると、お爺さんは先刻から瑞軒のした事を見て魂消でしまつて、キョロキョロしていましたが、廳で瑞軒のそばに来て、立派に両手をついて「那方は恐れながら何方様でございます」と問いました、瑞軒は笑いながら、私ですか、私は材木売です、ドウでしょうね、此辺に材木がありましようか」といふと、お爺さん、材木買かと始めて安心をした様で「ハア材木ですか、幾らでもあります、那方が今お錢を下さつた小児の中で、ソラ彼の丸顔の可愛い小児が一番コッチの方におりましたろう、アノ子のお父さんは、木曾の一等の山持ちでございます、其外、何所の家でも皆な材木がありますが、殊に彼の児の家は、大きいものです、」といひました、瑞軒は、これは面白いぞと心の中に喜んで、「お爺さん、甚だ申し上げかねますがね、一寸、その家まで案内をして貰いますまいか」といふと、「それはおやすい事です、今年はね、誰も木を買いに来ませんから、安価でも何でも皆な売りたい売りたいと申しているのです、アア今、お買いになる方は、徳ですよ、サア、ソレジャ、すぐご案内しましょうか」といふから、「イヤ、それはかたじけないことです」といひながら又財布からザクザクお金を出して、「お爺さん、これは、わづがばかりですがね、お茶代に、とって置いて下さい」といふまま、百両包んで差出した、どうでしょう、百両ですよ、今の千両ですね、お爺さんは又吃驚して、「イエイエ、こんなに戴いては罰があたります、これは途方もないこと、百両はさておいて一両だつて頂くことはできません」と押し戻しましたが、瑞軒は、マアマア、取つて置きなさいといひつて、どうしてもきかないからマア、私は、こんなに頂戴しては、罰があたるかと思ひます、コレハコレハマことに有り難う御座りますといひつて、いただくことにしました、その時お爺さんは思つたね何でも此の人は江戸の長者に違ひない昔は、大変なお金持ちを長者といひました（長者と記して示す）これ読めますか。〇〇（丁）。

（生）長者。（級決）

（教）そう、長者、長者というものは大変の金持ちでなければ言わないのです。所が瑞軒をば、長者の中でもえらい（大福と記して示す）大福長者と思つたのですから、サア、木曾に金の神様が舞い込んで来た、お茶代・・・百両・・・えらいもんだ・・・ドノ位この人にお金があるか分らない、何しろ福の神様が来た大福長者が来たと思つて、大層喜んでいました。

「サアそれでは、ご案内致しましょう」といふもんだから瑞軒は、「イヤそれはご厄介です、ね、」といふと「イヤイヤ、何と致しまして、サアコチラヘコチラヘ」といふので、行つて見るとナルホド其大山持での家は大きな家で、大きな門もあり邸も広い、門の所まで行つたらお爺さんが「モシ且那樣一寸お待ちください、私が先に行つて話して見ますから」といふと、門内に駆け込んで突然台所の方へ向つて雀踊りをしながら、「大福長者、大福長者が来ました、」と手をあげて、まるで舞をしておりますから、「お爺さん何だね、ソナに騒いでさ、」「マア聞いて下さい、ドレだけお金を持っているか分らない大福長者が来て、材木を沢山欲しいといひますぜ、其の大福長者様がお前様に会いたいといひつて、仰つしゃいますから今、門前までご案内をして、ソコニ、お待たせ申して置きました、マア、さっきも六七人の小児に小判をお土産に下さり、マア、私の所には、お茶代だつて百両、サア、早く、奥の座敷にお通し申さつしゃい」といふと、其家では、一寸掃除をしな

ければならないというので、奥座敷の掃除をする、兎に角田舎の人というものは不潔の人が多いものですから、コンナ時には、さわぎますね、しかし東京にも不潔の人がある着物を丸めて置いたり、何か、取りちらして置いたりして、其所等を片付けてないからサア、お客が来ると狼狽えて掃除をしなければならない様なことになりまますね、皆様にしても、何時机を明けて見ても、チャンと整然ているようでないと行けませんぜ、・・・それからやっと掃除も出来ましたから奥へ通しました。

サア、ここで、先生は、モー一度、考えなければならないと思うね、瑞軒は豪い敏速い人ですね、敏速いというのは周章のとは違うのですよ、周章というのは、急いで向こうに駆け寄るが、向こうに往ってから狼狽している、瑞軒は敏速い、敏速いけれども決して周章はいない、心にチャント考えて沈着にひかえていることができる、木曾に行ったって、もし、周章で如何にも材木を欲しいようにしては、コレハ、きっと、ナニカ、変なことがあるぞと言ってマテマテこんなときには、ひかえておって、模様を見るがよいなどと言って、なかなかうらなくなるから、大変高価いものを買はねばならぬことになるかもしれない、それ故にゆっくりしておって、いかにも、江戸あたりの金持ちというものは、こういうものかという様に、沈着ておったのですね、ああえらいもんですね、それから、よく挨拶をしてから「私は江戸から材木を買いに来ましたがね、ドウデショウ、那方の所の材木を売ってくれますまいか」と静かに話し出しました、「ハイ、手前どもの山は、この後ろから見えまする所がズーツとみなそうですが、かなりよい、材木もございます、いくら御入用ですか、さし上げましょう」「ソウですか、それはまことに、よい塩梅でした、ソナラ那方の山がドノ位あるかそれを皆な売ってください」「へつ皆ですか、大変御入用ですね、ソナナニ御入用ですか」「ハイ、皆売って下さい、山ですか、ナニ見るに及びません、何百町歩、ハハア、よろしい皆願いましょう」というから、幾許豪い材木屋だか分からないが、私の山を皆売ってくれという人は、これまで出会ったことがない、と思うていると、また財布から、「コレハ、約束した證しにあげるのです」というて百両だけ出しましたソシテ後は何時何時支払うという約束をしました、サア、山持は、自分の山を皆買われて、呆れていると瑞軒はまだ、外に山持はありませんかと聞くものですからいよいよ驚いて外の山持にもいってやったら、皆やって来て私の山の材木も買って下さい、私の所のも、私の所のもと皆やって来ました、瑞軒は夫ぢや那方のは約束の印に三十両だけあげて置く、那方のは幾町歩・・・それでは、コレハ、僅かばかりだが、約束の印にあげて置く、那方のが二十両、那方のは三十両と、五百両の金を手金にわたしたのです、手金という事が分かりますか（手金と記して示す）手金というのは、売った買ったという約束の金ですね、ソレカラ、後は幾何幾何何時の何日に遣るという約束をして、それでは買った山に、一寸と翌日杭を立てましょう、此の山は私の材木だという印を立てましょう、それから（杭の表に江戸河村十右衛門材木と記して示す）こういう杭を立てた、これが読めますか。〇〇（乙）。

（生）江戸河村十右衛門村木。

（教）村木ですか、〇〇（甲）。

（生）江戸河村十右衛門材木。（級決）

（教）そう、村木ではない材木です、先生の書き方がハッキリしなかったかね、此方の作

りが才の字なのです、こういう杭を立て、モウこれで大丈夫、今頃江戸の家などは真黒焦になっているだろう、今に材木屋がやって来るだろうと想着、ゆっくりして此所に泊まっていると、五日ばかり経つと江戸の方から大変な報知が来ました、江戸は非常な火事があつて全然、モー影も形もなくなった、日本開けて以来無い火事で死んだ人が幾人あつたのでした。〇〇 (丙)。

(生) 十万八千人死にました。(級決)

(教) そう、十万八千人死んだ、恐ろしい火事です、サア其の中に材木屋が木曾へ這入り込んで来た、山の方を見てうまいぞ、よい材木だな、これを早く買って一もうけして見せるぞと思ひながら来ると何だ「江戸河村十右衛門材木」オヤオヤはやい奴もあるもんだな、杭が新しいから近頃買ったものだろう、よしよしソナラ段々奥へ這入って行って、買って見せるは、といいながら、ハハア向こうの山は、よいぞあれならさっきの山よりもよい材木なようだ、うまいうまい・・・オヤオヤ、何だ、又、白い杭が見えるぞ「江戸河村十右衛門材木」何だツマラナイナ、河村十右衛門、何だ、一体、ドンナ人だ、素敵に早いことをやりおつたな、コレヤ幾許行っても不可ネー。モー止めよう止めよう江戸の河村という男はドウいう人かしらないが、少し譲って貰うより他には仕方がないというような具合で、これから多くの材木屋が十右衛門に頼んで少しずつ譲って貰う、瑞軒はこういう時も無闇に高いお錢を取る事はしない、此の人は何時でも品物は安過ぎるという位に売った、そう安価に売ったけれど、瑞軒が買ったのはまだ余程安価かつたから、ナカナカ儲けがあつた、私にも何百本私にも何千本というので、十日ばかりの中に売った中で五千両ばかり儲かつて、それでも未だ山が沢山あるのですよ、瑞軒は、ソレカラ、まず江戸へ帰ろうというので帰つて来ました、瑞軒の家のものはドウなつたと思ひます。〇〇 (乙)。

(生) 焼けない中に逃げました。

(教) ドンナにして行たでしょう。〇〇 (甲)。

(生) 駕籠に乗って八王子の方に。

(教) 八王子ですか、只東の方に行けばとばかり話した筈でしょう。

(生) 深川の方の田舎です。

(教) オ、ソーデス、東の方の田舎に行つておつたのですから、皆な丈夫でおりました、瑞軒が帰つたので、大変に喜んで、まず無事でよかつたとお互いに喜びました、ところが、よその人は、ドンドン燻っている中に、真黒焦になって死んだ人もある。怪我をした人もある、散々の目にあつたのですが、瑞軒は早く田舎へ行けと言つて置いたから、家内中怪我も何もしなかつたのです、これもすばしこくて、しかもあわてないのですね。瑞軒は一寸の間に五千両の金を儲けて来たから、早速芝の愛宕山の下に恐ろしい大きな家を建てました、世間の人等は未だ立ち退いたばかりで、家どころではないのに、瑞軒は立派な家を建てました、木曾から上等の木を取り寄せたてた家ですから、スバラシイ立派な家が出来たのです、わずか十日ばかりに五千両も儲かつて、それで、材木は山程あるのですから、そこで瑞軒は又元の商売を始めました。元の商売は何でした。〇〇 (乙)。

(生) 受負師です。(級決)。

(教) 受負師というのはドンナ事をするのです。〇〇 (甲)。

(生) 左官や大工を遣つて家を建てたり橋をかけたりするものです。(級決)

(教) そう、例えばこの門とか、家とかがいくらできる、こういう木を使って、こういう風にそろえて何百円で出来るとか、何千円で出来るといって受負うのです、瑞軒はそういうことを仕事としておりました、ソシテ、瑞軒は、受負いをするときこういう木で建てて何日頃まで、幾許で立てて下さいという注文をうけて、宜うございますと一旦約束をすると、決してそれを間違いません、必ず、其通りにしてやりました、それですから、瑞軒は、決して怠慢い事をしない極く正直なのです、千両で受負ったものは、仮令い損が入っても屹度最初約束した通りにそろえて渡します、余所の受負師は受負師根性と言って、最初約束したよりは悪い木を使って、ごまかしてこれで受取して下さいなんぞという、それですから、風でも吹くとか地震がゆるとかすると、直ぐ倒れるけれど、瑞軒は極く正直なものですから、よその人は、皆彼の人に受負わせるとよい家が出来るといって評判で、千両の普請とか二千両の普請とか、それから一万両の普請とか段々大きな受負をするようになり、大工や左官や其他職人を大勢使って、大名方などの普請を受負ったから段々お金が沢山出来て、モー五千両どころぢやない、段々に、何十万両というように殖えていきます、大変な身代でしょう、そんなに、ふえて行くのですから、これから色々のお話があるのですけれども、きりがよいから今日はこれ丈にして置きましょう、今日は、お話を、ここまでにして置きましょうが、一つ、皆さんに聞いてみたいことがあります、瑞軒は火事の半ばに木曾へ行って金儲けをしました、瑞軒でない他の材木屋は、火事の時にドンナことをしておったのでしょうか、〇〇(乙)。

(生) 自分の家の荷物なんかを運んで居ったのだらうと思います。(級決)

(教) その荷物を焼かないようにする事が出来たでしょうか。〇〇(甲)。

(生) 出来ません。(級決)

(教) そう、さきに荷物なんか出すときには、モー此辺ではよかろうと思うて出したのも、又其所へも、火が飛んで来て向こうへ運ばなければならないというようになり、又向こうへ運ぶと火が回ったというような訳で、荷物は焼けて仕舞い、おまけに、怪我をしたものもあるでしょうし、何しろ此間お話ししたような豪い風ですからナカナカとまらないね、スッカリ焼けて仕舞って、ドウしたらよかろう、仕方がないから木曾へでも行って材木でも買って来ようかというて来たのでしょうかね。そういう人達と瑞軒と比較べて見ると、何所か違う所があるようだね。ドウです。〇〇(甲)。

(生) 瑞軒の方は敏捷い(級決)

(教) そう、敏捷い、瑞軒は大変敏捷いが、其他に豪い所はないか。〇〇(丙)。

(生) 正直。(級決)

(教) 幾許、敏捷くても正直でなければならぬ、近頃の人、商人というものは虚言をつけばよいと思うている人もあるそうですが、決してそうではありません、一寸反物を買うとしても、お客さまがこれは色が褪せるかと聞くときに、いえ大丈夫ですといつてうそをついたら、お客さまは真正にして其の反物を買って帰りましょう、サア、何時か雨に遭って其色が直ぐ褪めたらどうです、こういう事があるとモー其次にはソナ所に買物に行きませんね、アア、彼所の家物は駄目ですといつて仕舞う、若し先に「これは色が落ちませんと申上げたいのですけれども、真正はコチラよりは、色がさめやすうござります、此方ならば大丈夫です」といって正直にいうて売ってごらん下さい、それを買った人は、い

かにも色が変わらないのを見て、喜んで、何でも彼所で買えば大丈夫だと斯うなる、ソシテ店が繁盛するようになるのですね。

(教) そうすると、瑞軒は、どんな処が人よりも偉いわけですか。

(生) すばしこいことと正直なことと。(級決)

(教) そうです、(教師すばしこい、しょうじきと板書す) 瑞軒は正直で敏捷い此の敏捷い人に正直という事があるから、それで人によく言われお金も儲かったのですね、敏捷いという事はドウすればよいですか。

(生) 甲、物事を早くすればよい。

(生) ○○乙、知恵を出す。

(教) よろしい、ナンデモ、お稽古をよくして智慧をみがいて一寸聞いたらすぐわかるようにして置くのと、今、誰かが言ったように、物事を早くするのが、よいですね。

(教) あなた方が、若しえらい商人になろうと思えばどんなことに気をつけたらよいでしょうね。

(生) 敏捷いようにします。

(教) それだけですか。

(生) 正直でなければなりません。

(教) そう、正直ばかりで敏捷くなくてはいかん、敏捷くあっても正直でなくては不可ません、敏捷くてそして正直でなくては不可ませんね。

(教) 敏捷くて正直なことの大切なのは商人ばかりですか。

(生) 他の人でも敏捷くて、正直な方がよい、(級決)

(教) そう、まず、敏捷くすることから、いうと、どんなことがありますかね。

(生) 集まれと言う時は、早く集まる。(級決)

(教) そう、集まれという時も、止めと言う時も休めと言う時もなんでも、早くキチンとやるがよいのですね、此頃の学校の運動会があった時などは、先生は、皆なが一生懸命で、すばしこくやったのを大へんよいことだと思いましたが、皆さんの運動した数は、百何十遍もあるのに、たった、五時間で遣って仕舞いましたね、ナンデモ、三分間位で一遍ずつやったそうですが、大へん、よいことでした、総てグズグズしているのは、ごくよくありません、尚ほ来年は今年よりもナンデモ敏捷く出来なければなりませんね、他にも敏捷くやらなければならないのは、まだ色々ありましよう、このつぎまでに考えついたら先生に言う様にしなさい、それから正直、何時でも正直でなければ不可ません、これは、いつかお話したことですからわかっておりましよう、今日は、モー、時間になった様ですから、このつぎに聞くことにしましよ。

(生鈴木) 気を就け……。礼。左、右、左、右、(一同退場)

ⁱ 藤原喜代蔵『明治大正昭和 교육思想学説人物史』第2巻、明治後期編、1943年、湘南堂書店 pp. 293-294

ⁱⁱ 42年の誤りか

ⁱⁱⁱ 文中、「明暦三年(今より百四十四年前)の江戸の大火」とあるので、1901(明治34)年(244年前の誤植か?)に実施された授業と思われる